



## フィールド 自然・地域・人に学び、現場で試す実践型授業

国際学部 海津 ゆりえ



立教大学理学部化学科卒。理学士（立教大学）、農学博士（東京大学）。地域プランナー実務を経て、2007年4月に文教大学国際学部へ。専門はエコツーリズム、地域の宝探し。エコツーリズムによる災害復興支援、廃校を利用したエコツアー拠点整備などを学生とともに手掛ける。フィールドは宮古市、磐梯地域、奄美、八丈島、箱根、ガラパゴス諸島など。奄美群島振興開発審議会委員、奄美・沖縄世界自然遺産地域科学委員などを兼務。

（かいづ ゆりえ）

毎年、国際学部は秋学期開始直前の金曜日に来年度のゼミ生募集のガイダンスを行う。昨夜もその準備をしながら、来年の学生が18期生であることに気づいた。Wow！時が経つのは早過ぎる。学部再編、東日本大震災、COVID-19、キャンパス移転などイベントが多かったせいか、一瞬であった。気を取り直し、筆者のこと、担当する授業のことをご紹介します。

プロフィールを少し補足する。大学で生化学を専攻した後、地域プランナーを志して建築設計事務所に勤務し、そこで出会った「エコツーリズム」を仕事にすべく転職、そして自社を設立し、経営の傍ら農学博士号を取得した。実務から教育に切り替えようと本学の公募に応募し、採用されて現在に至る。生化学から地域計画へというのは大転向のようだが、生きものが幸せに暮らせる環境を作りたい、という基本の延長に過ぎない。だが、実験室から地域社会へとラボが広がると、理論では片付かないことばかり。現場に堪えない理論はまやかしである。大学教員を志望したのは、こんな私の経験値と研究の面白さを次世代に伝えたいと考えたからであった。そんなわけで、担当するどの科目でも、学生には一貫して現場に出ること、実験すること（＋失敗すること）を説き、隙あればフィールドに連れ出している。私の専門ゼミに入った学生は忙しい2年を送る羽目になるのだが、ど

うやら学生もそれを狙っているようだ。

筆者が思う“文教大学らしさ”を表す授業として、担当科目から「国際学入門」「地域プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」「エコツーリズム論」をご紹介します。

「国際学入門」は、国際学部生が1 Semesterで受講する週2回の必修科目である。国際学部創設10年後の2000年度、2学科（国際コミュニケーション、国際関係）移行時に戸田・立川両教授が担当、その後戸田・藤巻教授体制へ、戸田教授退職後は山脇、奥田、横川教授などが参画し、以後人材が入れ替わって現在に至る。1学年約300名の学生がAITADE HALLに集まり、30回の講義を受けるのであるが、これを国際学部の教員4名と3名のアシスタント学生で運営している。担当教員は私のほか孫・久保庭・杉浦の面々である。4人全員で、1人で、ゲストを交えて、など多様な講義形式で行う。講義テーマは毎回異なるが、いわゆる“国際学部で教

えそんなこと”は見当たらない。例えば「観光は世界を一体化するのか?」「『島』からみた日本の姿」「ブラック校則を考える」「セクシュアルマイノリティの視点から」など、一捻りしたタイトルが並ぶ。これまでの学校教育で教えられてきた常識を、一度unlearn（アンラーン）しようという趣旨が貫かれている。学生は、教員やゲストからの問いかけに応じて考え、議論し、マイクに向かってコメントしながら世界とは何か、地球とは何かを思う。29回目の講義は、盲目のフルート奏者の縄文笛穀氏を招いてのコンサートである。縄文時代の笛を再現した楽器の演奏を全員で聴くのだ。教室内に時空を超えた音色が響き渡る。

「地域プロジェクト演習」はⅠ（理論編）、Ⅱ（応用編）を春・秋を通じて開講する。地域を見る目を育て、地域の課題を解くプロセスを学ぼうというPBL型の演習科目である。Ⅰでは地域を調べる多様な手法を学び、身近な地域の知らなかった姿を紐解いていく。時間軸、空間軸、統計データ、新聞記事、自治体の計画書などを読み込んでプレゼンテーションを行う。Ⅱではいくつかの自治体のご協力をいただき、現実存在する地域の課題を出題していただく。学生は9月から1月までの4か月をかけて、課題の真相を分析し、フィールドワークを行い、解決策を考え、最後の授業で提案のプレゼンテーションを行う。2021年度からは足立区や草加市のご協力を頂いている。自治体は学生のアイデアへの期待が大きく、毎年、中間報告、最終報告では真剣な議論が展開される。演習のアウトプットが採用されることも少なくない。例えば、現在、文教大学と六町間を走っているコミュニティバスの名称「ブンブン号」はこの授業の演習チームのアウトプットである。学食のメニューに野菜を多めにいただいたのも同様である。

「エコツーリズム論」は、私の専門分野ド真ん中の講義である。エコツーリズムは、観光による経済効果を維持しながら自然や文化の保全と継承に寄与するということであるが、講義ではその歴史と展開、課題などの一連の重要事項を学び、エコツアーガイドから直接現場の話を聞く。終盤には学生自らがエコツ

アーを造成する体験を組み込んでおり、学生によるキャンパス周辺でのミニ・エコツアーで講義が終わる。毎年、工夫を凝らしたユニークなツアーが生み出される。今年はキャンパス内の植物を観察するチーム、毛長川の工事現場を紹介したチーム、桜花亭の庭園を巡ったチームがあった。学生のコメントには、日々通り過ぎる場所にある価値に気付いたこと、身近な風景に対するまなざしが変わったこと等が綴られている。ガイド役の声が出なかったり、用意したiPadが使えなかったりとハプニングもあるが、その反省こそ学びである。

・・・

冒頭で“文教大学らしさ”と表現したが、筆者はそれを「学生と教員、学生と学生の豊かなコミュニケーションがある」「教室に閉じこもらない」授業と考えている。そのような体に染み込んでいくような授業が本学の学生には合っているように思うのだ。文教大学の学生は、他者とのコミュニケーションを楽しむスキルが高いと感じる。ゲスト講師からも「授業中に視線が合う学生が多くて授業が楽しい」とよく聞く。学生自身は気づいていないのかも知れないが、これは学ぶ姿勢として大きなアドバンテージである。そうやって学生自身が無意識に吸収しているものをアウトプットさせれば、1回の授業が何倍にもなって学生に還元されるはずである。そのようなことを考えるので、授業内容もさることながら、“どこで笑かすか”といったお笑い芸人のようなネタ仕込みに頭を悩ますことになる。道理で忙しいわけである。



「エコツーリズム論」履修学生たちによる毛長川エコツアー。  
親水広場がガイドスポットに早変わり。